サンタ・マリア・イン・ポルト聖堂（ラヴェンナ）の浮き彫り聖母イコン

太田　英伶奈

はじめに

ビザンティンのイコンといえば、まず思い浮かぶのは板にテンペラで描いた作例である。しかし、少数ながら石に浮き彫りを施した作例も存在する。その一つが、初期キリスト教の荘厳なモザイクの数々で知られるラヴェンナに現存する。現在サンタ・マリア・イン・ポルト（Santa Maria in Porto）聖堂が所蔵するその浮き彫りイコンは、通称「マドンナ・グレカ」、つまり「ギリシアの聖母」と呼ばれ、今日もラヴェンナ市民の崇敬を集めている。本稿では、先行研究で指摘されている情報を再確認しつつ、本作の由来について再考してみたい。ヴェネツィアやアンコーナに残る類似作例との関連における本作の位置づけについては、今後の課題とする。

浮き彫りによるビザンティンの石製イコンは、ビザンティン彫刻史を語る上で欠かせない資料といえるだろう。少なくとも 67 点[1] 以上が現存しており、その多くが両腕を広げたオランスの聖母マリアを単身で表した大理石製イコンである。制作時期は 10 ～ 12 世紀に集中しており、マケドニア朝やコムネノス朝が栄えた時期にあたる。これらの浮き彫りイコンの多くがヴェネツィアをはじめとしたアドリア海沿岸の都市に現存する。ただし、中にはイタリアで制作されたある種の模刻と思われる作例も含まれる。こうした模刻と、ビザンティン帝国で制作されたいわばオリジナルとを確実に判別する基準は、残念ながら今のところ存在しない[2]。　本稿で取り上げるサンタ・マリア・イン・ポルト聖堂の浮き彫りイコン（図 1）は、なかでも出色の作例といえよう。本作は同聖堂の北トランセプトに設けられた祭壇に安置されている（図 2）。祭壇の周囲には浮き彫りイコンに捧げられた奉納物や、ラヴェンナの街を守護する聖母の礼拝用板絵などが飾られている。

サンタ・マリア・イン・ポルト聖堂はラヴェンナの聖堂としては比較的新しく、1553 年に着工され、1606 年に献堂式が行われた。しかし、バロック式のファサード以外の部分は初期バシ

---

[1] 浮き彫りイコンのカタログである R. Lange, *Die byzantinische Reliefikone*, Recklinghausen 1964. に掲載された作例の総数。ただし、ヴェネツィアのサン・マルコ聖堂が所蔵する 5 点のブラケルニティッサ型浮き彫りイコン（注 25 参照）はうち 1 点しか掲載されていないことから、実際に現存する作例は 67 点を超えると推測される。

[2] O. Demus は判別の基準として、ビザンティンで制作された作品は枠と枠内に表現された人物像の間に余裕がある一方で、イタリアで制作された作品では枠いっぱいに人物像が表される傾向があるとしている。この法則に沿えば、サンタ・マリア・イン・ポルト聖堂のイコンはイタリアで制作されたことになる。O. Demus, *The Church of San Marco in Venice: history, architecture, sculpture*, Washington 1960, p.122.

図 1 ブラケルニティッサ型浮き彫りイコン、ラヴェンナ、サンタ･マリア･イン・ポルト聖堂

図 2 浮き彫りイコンが安置された祭壇、ラヴェンナ、サンタ・マリア・イン・ポルト聖堂北トランセプト

リカ建築の様相を呈している。これは、ラヴェンナの城壁外にあった 5 世紀の建造になるサン・ロレンツォ・イン・カエザレア（San Lorenzo in Caesarea）聖堂の建材を転用した結果と考えられている。

なお、本作ははじめサンタ・マリア・イン・ポルト聖堂ではなく、ラヴェンナ城壁外に建つサンタ・マリア・イン・ポルト・フオリ（Santa Maria in Porto fuori）聖堂が所蔵していたが、本稿ではサンタ・マリア・イン・ポルト聖堂の浮き彫りイコンと呼称することにする。

作品の概要

高さ 116cm、幅 60cm の大理石[3] に浅浮き彫りによって聖母マリアが表されている。本作に限らず、浮き彫りイコンは概して像高 100~150cm と大型であり、中には像高 200cm に達する作例（図 3）もある。本作の聖母マリアはマフォリオンを纏い、オランスのポーズをとる、ビザンティ

[3] C. Rizzardi, “La “Madonna Greca” di Ravenna nella cultura artistica, nella leggenda e nella memoria storica della città” in *Deomene: l’immagine dell’orante fra Oriente e Occidente*, Milano 2001, p.44. や G. Orioli, “Origine del culto della Madonna greca nella "casa di Nostra Donna in sul lito Adriano”", *Ravennatensia* 20 (2003), p.147. ではパロス島産の大理石とされているが、根拠は示されていない。

ンの図像学ではブラケルニティッサ型と呼ばれる表現 である[4]。頭部、両肩、両手首、マフォリオンの裾、そして両膝にはそれぞれ金属製の十字架がはめ込まれている。現存する他の浮き彫りイコンにもかつてこのような十字架が取り付けられていたことを示唆する穿孔が見えるものがある[5]。頭の左右には、ギリシア語で「神の母」を表す Μήτηρ Θεοῦ（Meter Theou）の略語が入った金属製の円盤が設置されている。同じく金属製のニンブスは恐らく当初からのものと思われるが、王冠は故ヨハネ・パウロ 2 世によって 1998 年に補填されたものである。

わずかに曲げた右脚によって強調されるコントラポスト、衣装の下で量感を失わない身体表現は、観者に古典的な印象を与える。顔の部分は特に念入りな造形がなされており、瞼は二重の刻線によって表され、眉のたわみ方も繊細である。ランゲやエッフェンベルガーは、こうした顔の造形からほとんど少女らしい印象が生まれていると述べている[6]。また、本作には彩色の痕跡が残るという指摘も見受けられる[7]。たしかに、詳細に観察するとマリアの胸部を覆うマフォリオンに赤い顔料がかすかに残っている。両腕や衣装の下裾に残る顔料は、褪色してはいるものの、本来は青色だったのではないかと思われる。右脚の周囲やベルトの部分には、わずかながら金箔も付着している。外縁部には、赤と青の二重の線が認められる。これらの顔料が制作当時に塗付されたものかどうか定かではない。

図 3《マンガナの聖母》、イスタンブール考古学博物館

制作地および制作年代について

浮き彫りイコンを所蔵するサンタ・マリア・イン・ポルト聖堂は、本作がコンスタンティノポリスからもたらされた聖像であると主張している[8]。また、多くの先行研究も本作の由来をコンス

---

[4] 研究者によってはオランスの聖母の胸元にキリストのメダイヨンがあるものをこの名で呼ぶ場合もある。益田朋幸、辻絵理子「アプシス装飾としての『オランスの聖母』」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第52 輯第3 分冊（2006 年）35-36 頁を参照。ブラケルニティッサという添名の由来になったブラケルネ修道院は様々な図像タイプの聖母イコンを所有していたため、単にブラケルニティッサ型といってもオランス以外の図像を指すこともあり、図像と添名の対応関係は一様ではない。オランスの聖母マリアの図像類型と各図像に付される添名についてはG. M. Lechner, “Maria, IV. Typen des M. bides, 2. M. orans” *Reallexikon zur byzantinischen Kunst*, Bande VI, Stuttgart 2005, pp.42-54. を参照。

[5] 本稿図 3 の作例や、テサロニキ、ビザンティン文化博物館所蔵の作例（M. Vassilaki, *Mother of God : Representations of the Virgin in Byzantine Art.*, Milano 2000, p.240）など。

[6] R. Lange, *op.cit.*, p.51.; A. Effenberger,. “Die Reliefikonen der Theotokos und des Erzengels Michael im Museum für Byzantinische Kunst, Berlin,” *Jahrbuch der Berliner Museen* 48 (2006), p.26.

[7] A. Effenberger, *op.cit.*, p.26.; C. Rizzardi, *op.cit.*, p.44.; G. Orioli, *op.cit.*, p.148.

[8] サンタ・マリア・イン・ポルト聖堂公式ウェブサイト

タンティノポリスに求めている[9]。確実にビザンティン帝国の首都で制作されたと断言することはできないが、一方で帝都以外の制作であることを立証する手立てもないため、現状では定説として受け入れられているのだろう。コンスタンティノポリスでの制作を主張する際、根拠として頻繁に取り上げられるのが本作と首都のマンガナ宮殿と聖ゲオルギオス修道院に挟まれた聖堂跡から出土[10]した《マンガナの聖母》（図 3）の様式上の類似である。《マンガナの聖母》にも、エッフェンベルガーによってやはり 11 世紀半ばという年代が与えられている[11]。浮き彫りイコンのカタログを著したランゲは、両脚や衣装の衣襞の表現が《マンガナの聖母》の様式に添っていると指摘している[12]。ランゲの指摘通り、両作例とも遊脚は右脚である[13]。膝の上下に表された衣服の皺が Y 字状となっているのは、11 世紀以降のビザンティン絵画に見られる白でハイライトを表す Glanzlichterstreifen という技法の影響を受けたためとランゲは指摘する[14]。エッフェンベルガーはやはりイスタンブールで出土した聖母マリアの頭部の表現をサンタ・マリア・イン・ポルト聖堂の浮き彫りイコンと関連付けている。頭を覆うヴェールの柔らかな襞などは、両作例に共通した要素といえよう。リッツァルディは様式上ラヴェンナの作例と最も近いのは、ヴェネツィアのサンタ・マリア・マーテル・ドミニ（Santa Maria Mater Domini）聖堂が所蔵する作例であるとしており、両作品は同一工房の作ではないかと推測している[15]ほどである。

筆者は制作地について明確な見解を表明することは避けたいが、サンタ・マリア・イン・ポルト聖堂の作例における衣服の衣襞の表現は、ランゲが主張するほど《マンガナの聖母》と類似しているとは思われない。前者では後者に比べて衣襞の表現が様式化の進んだ様相を呈している。特に左肩から胸部全体にかけて、《マンガナの聖母》にみられる細かな襞が相当省略されている。マフォリオンの裾は折り返し部分がジグザグ状に簡略化されているため、角張った印象を受ける。《マンガナの聖母》では表現されている腰紐の垂れ下がりも省略されている。他にも、《マンガナの聖母》にもサンタ・マリア・イン・ポルト聖堂の作例にもマリアの足下に足台が彫り出されているが、視点がそれぞれ異なっている。サンタ・マリア・イン・ポルト聖堂の作例では足台の側

（http://www.santamariainporto.it/static,historia_ikony.html　2015/10/17 閲覧）を参照。

[9] C. Rizzardi, “Il Rilievo marmoreo con l’immagine della c.d. Madonna Greca in S. Maria in porto di Ravenna” in *Felix Ravenna*, IV serie, fasc.1/2, CXIII-CXIV (1977), p.300.

[10] N. Firatli, *La sculpture byzantine figurée au muse archéologique d’Istanbul*, Paris 1990, p.179.

[11] A. Effenberger, *op.cit.*, p.26.

[12] R. Lange, *op.cit.*, p.51.

[13] 現存する他の作例ではヴェネツィア、サン・マルコ聖堂所蔵の《マドンナ・デッラ・グラツィア》（*Ibid.*, fig.2）のように遊脚が左脚のものも少なくない。

[14] この Glanzlichterstreifen は、おそらくクリソグラフィーのことを指していると思われるが、クリソグラフィーは白色ではなく金色でハイライトを示す技法なので、ランゲの本意は今ひとつ判然としない。*Ibid.*, p.51. クリソグラフィーに関しては以下が最新の研究。J. Folda, *Byzantine Art and Italian Panel Painting: The Virgin and Child Hodegetria and the Art of Chrysography*, Cambridge 2015.

[15] C. Rizzardi, 1977, p.303.

図 4 マフォリオン裾部分の文様

図 5 大天使ミカエルの衣装の文様、ラヴェンナ、サンタポリナーレ・イン・クラッセ聖堂

面は表現されていない。

マリアの左腕から垂れ下がるマフォリオンの一部に残る文様（図 4）が、同じラヴェンナのサンタポリナーレ・イン・クラッセ聖堂の勝利門壁面に表された大天使ミカエルとガブリエルの衣装の文様（図 5）とほぼ一致することは指摘しておきたい。イコンが当初安置されていたサンタ・マリア・イン・ポルト・フオリ聖堂はサンタポリナーレ・イン・クラッセ聖堂から約 3.5km と遠くない。

本作がビザンティン由来のオリジナルであると多くの研究者が比定する背景には、当初イコンが安置されていたサンタ・マリア・イン・ポルト・フオリ聖堂に伝わるイコン招来の伝説も一役買っていると考えられる。寺伝[16] が伝えるところによると、復活祭後の最初の日曜日にあたる 1100 年 4 月 8 日[17] の早朝、海上に突然二人の天使に伴われた聖母のイコンが出現し、ピエトロ・デッリ・オネスティ（Pietro degli Onèsti, 1049-1119）という名の僧侶がイコンを受け取ってサンタ・マリア・イン・ポルト・フオリ聖堂に安置したのがラヴェンナにおける本作の崇敬の起こりということである。

管見の限りではこの伝説自体にコンスタンティノポリスからもたらされたという文言は明確に示されていないが、海の向こうからやってきたビザンティン様式のイコンは、やはり人々に

[16] 寺伝 Memorie Portuensi の原本は既に逸失しているものの、17 世紀の写本が現在ラヴェンナ市立クラッセ図書館に Codice Classense 647 として収蔵されている。しかし写本を閲覧することができなかったので、本稿では A. Benini., *La basilica rinascimentale di S. Maria in Porto e i suoi cimeli: storia ed arte*, Ravenna 1950, p.30ff.; L. Babini et.al., *Omaggio a Nostra donna in sul lito Adriano : storia di un'icona, storia di una città ; mostra celebrativa per il IX centenario della "Madonna greca" ; mostra storico-didattica allestita nella chiesa di S. Domenico in Ravenna, 29 aprile - 11 giugno 2000*, Ravenna 2000, p.21.; C. Rizzardi, 2001, pp.44-47. およびイコンの現在の所蔵先であるサンタ・マリア・イン・ポルト聖堂公式ウェブサイトに掲載された文章（http://www.santamariainporto.it/static,historia_ikony.html 2015/10/17 閲覧）を参照した。

[17] オリオーリは Memorie Portuensi の他箇所の記述も考慮に入れ、これよりやや遡る 1096 年 4 月 20 をイコン到来の日と推定している。この日付もやはり復活祭翌週の日曜日にあたる。G. Orioli, *op.cit.*, p.151.

コンスタンティノポリスを思い起こさせるものであったのだろう。コンスタンティノポリスからヴェネツィア周辺のアドリア海都市にもたらされた美術品となれば、すぐさま第四次十字軍の戦利品である可能性を疑いたくなるが、本作は伝説で語られている通り、第四次十字軍以前からラヴェンナに存在していたとみるべきである。というのも、既に複数の研究者によって指摘されている[18]ことだが、かつてラヴェンナ市内に存在したバシリカ・ウルシアーナ（Basilica Ursiana）のアプシスを飾っていた1112年制作のモザイクに、本作と同じブラケルニティッサ型の聖母を表したものが認められるためである（図6）。1734年に着手されたバシリカ・ウルシアーナの取り壊しに伴い、アプシスのモザイクもほとんどが失われた[19]が、幸いこの聖母マリアを含む断片数点がラヴェンナ大司教館附属博物館で展示されている。1112年の制作であるとする根拠は、モザイクの下部にHOC OPUS EST FACTUM POST PARTUM VIRGINIS ACTUM ANNO MILLENO CENTENO POST DUODENO（この作品は、聖母が御出産されてから1112年後に作られた）という銘文が記されていた[20]ことによる（図7）。モザイクの聖母マリアも《マドンナ・グレカ》と通称されていることからも分かる通り、サンタ・マリア・イン・ポルト聖堂のイコンとほぼ同じ図像であるが、頭部の左右に入れられた略語はギリシア語ではなくラテン語のSCA MARIA（聖なるマリア）であり、イタリアの職人によって制作されたとみてよいだろう。オランスの聖母自体は決して特異な図像ではないので、サンタ・マリア・イン・ポルト聖堂の浮き彫りイコン以外の作例を参照した疑いも拭えない上、両作例にはマフォリオンの形状や腰紐の有無など細かな差異も存在する。しかし、モザイクの制作年代は浮き彫りイコン招来の年と伝わる1100年のわずか12年後である。アプシス下部に表されているのはラヴェンナと関係の深い聖人聖女であることも考慮すると、やはりこのイコンを手本としている可能性が高いだろう。つまり、イコンは少なくともモザイクが制作された1112年までにはラヴェンナにあったといえる。以上の点より、筆者は制作年代が11世紀ごろであることには賛同したい。

図6 オランスのマリア、1112年、ラヴェンナ、大司教館付属博物館

ヴェネツィアとの関連

[18] C. Belting-Ihm, *Sub matris tutela : Unters zur Vorgeschichte d. Schutzmantelmadonna*, Heidelberg 1976, p.226., C. Rizzardi, *op.cit.*, pp.45.

[19] G. Gardini et.al., *Le collezioni del Museo arcivescovile di Ravenna*, Ravenna 2011, p.140.

[20] *Ibid*, p.143.

現存する浮き彫りイコンの多くが博物館や美術館に収められ、もはや当初の機能を果たしていないのと対照的に、サンタ・マリア・イン・ポルト聖堂の作例は現在も崇敬の対象となっている数少ない例である。このイコンが白衣の主日[21]、つまり復活祭の次の日曜日に出現したことを記念し、ラヴェンナでは毎年の白衣の主日が聖母の祝日として祝われてきた。この日、市民は浮き彫りイコンを聖堂から海上へと運び出し、海から行列をなして再び聖堂内へとイコンを戻す。恐らく、1100 年のイコン出現の故事を再現する行事なのであろう。

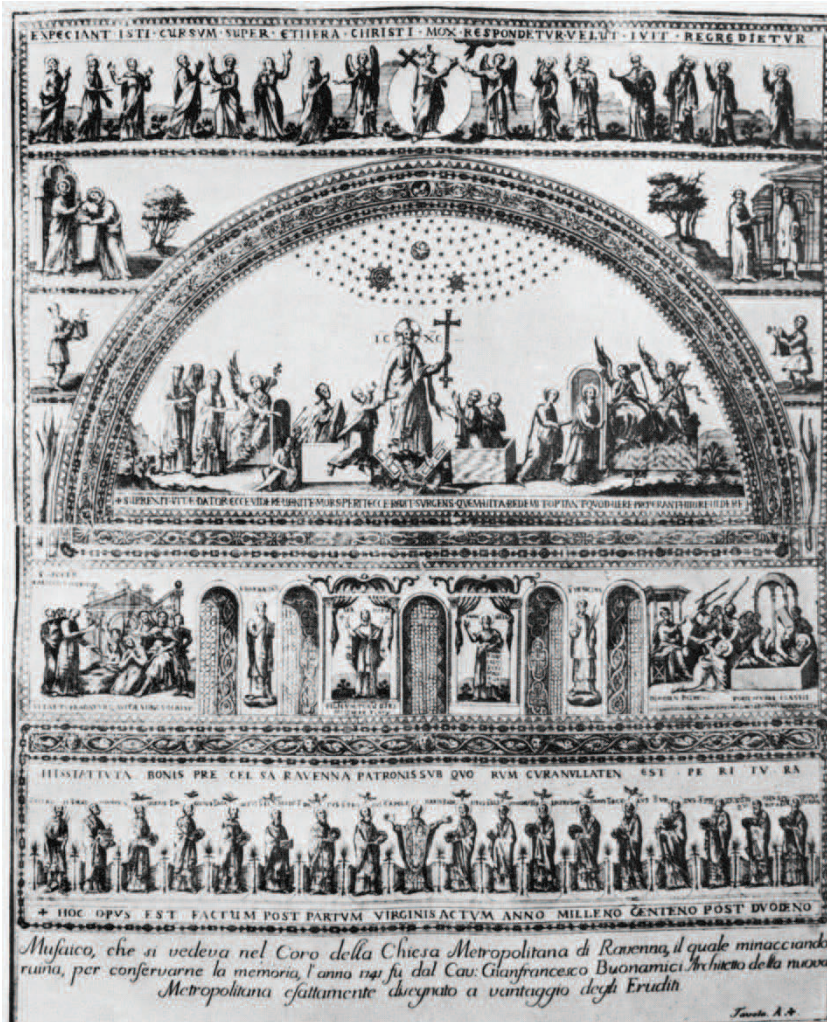

図 7 Gianfrancesco Buonamici によるウルシアーナ聖堂アプシスモザイクのスケッチ、1741 年。中段中央の窓左にオランスの聖母マリア、最下段に 1112 年の年記のある銘文が確認できる。

[21] 白衣の主日は、東方正教では聖トマスの祝日にあたり、光明週間が終わった翌日でもある。イコンがこの日に出現したことに特別な意味を見出す先行研究は管見の限り存在しない。

かつてラヴェンナ自体がビザンティン帝国の一部だったとはいえ、12 世紀の時点でラヴェンナ総督府が消滅してから既に 3 世紀半が過ぎようとしている頃であり、ラヴェンナとビザンティンとの直接の関係は薄まっていた。しかし、当時ビザンティンの政治経済に深く食い込んでいたヴェネツィアとは何かしらの連携[22]があったものと思われる。浮き彫りイコンの当初の安置所であるサンタ・マリア・イン・ポルト・フオリ聖堂を聖別したのはジョヴァンニ・ダ・カ・ボーノ（Giovanni da Ca 'Bono）という名のヴェネツィア人[23]であった。この 1131 年の聖別時にイコンが持ち込まれたのではないかという見解[24]もある。ヴェネツィアにはラヴェンナと同型の浮き彫りイコンが 7 点も現存[25]しているため、当時のラヴェンナとヴェネツィアとの関係は、サンタ・マリア・イン・ポルト聖堂所蔵の浮き彫りイコンの由来を考える上で重要である。特にサンタ・マリア・マーテル・ドミニ聖堂が所蔵する作品については、リッツァルディにより様式上ラヴェンナの作例に最も近いと指摘されていることには既に言及した。冒頭でオランスの聖母を表した、つまりサンタ・マリア・イン・ポルト聖堂の作例と同型の浮き彫りイコンはアドリア海沿岸を中心に多く現存すると述べたが、ヴェネツィアがこれらのイコンとそれにまつわる信仰のあり方を受け入れる窓口であった蓋然性は高いだろう。そして、ラヴェンナではその崇敬が 900 年経った現在でも、まだ活きているのである。

図版出典

図 1：サンタ・マリア・イン・ポルト聖堂発売の写真入りリーフレットより。撮影は Tipografia B.N. Marconi, Genova による。

図 2：筆者撮影（2015 年 8 月 31 日）。

図 3：M. Vassilaki, 2000, p.239.

図 4 ：図 1 参照。

図 5 ：筆者撮影（2015 年 8 月 30 日）。

図 6 ：D. Massimiliano, et.al., Eternal Ravenna : from the Etruscans to the Venetians, Turnhout 2013, p.233.

図 7 ：C. Belting-Ihm, op.cit., Tafel XVII.

---

[22] とはいえ、ラヴェンナがヴェネツィアに掌握されるのはやっと 1441 年のことである。なお、かつてヴェネツィアはラヴェンナ総督領に含まれていた。

[23] C. Rizzardi, 1977, p.310.

[24] Ibid, pp.309-10.

[25] このうち 5 点はすべてサン・マルコ聖堂が所蔵する。サン・マルコはコンスタンティノポリスの聖使徒聖堂を模して造られたと云われているだけに、この事実は興味深い。サン・マルコの浮き彫りイコンについては O. Demus, *The Church of San Marco in Venice: History, Architecture, Sculpture*, Washington 1960. および C. Davis, *Byzantine Relief Icons in Venice and Along the Adriatic Coast: Orants and other Images of the Mother of God*, München 2006. に詳しい。